

## 話題の人

●インタビュー



しま りょういち  
手嶋 龍一  
(外交ジャーナリスト、作家・塾員)

# 北の大地で

# 世界で戦う馬を育てる

ノーザンファーム代表

## よしだかつみ 吉田勝己さん



塾員(昭46商)。ノーザンファーム代表。競走馬の生産者として「世界に通用する強い馬作り」に取り組む。

### ▼ディーブインパクト引退の理由

——吉田さんの経営する牧場、北海道安平町のノーザンファームはディーブインパクトをはじめ、過去十年で日本ダービ

ーに五勝と圧倒的な成績を残していますね。ディーブインパクトは凱旋門賞では残念な結果に終わってしまいました。吉田さんはパリにいらして、そのときの様子はいかがだったのでしょうか。

吉田 いまとなつては薬物の問題が浮上し、結果的に失格になってしまったのですが、本当に勝つつもりで行ってたんですよ。あの馬が自分の力を出し切れれば負けないだろうと思っていましたから。

——馬に吸入させるための薬が寝薬にかかってしまつて、それを食べてしまったとか。

吉田 どうやらそういうことらしいですね。詳細は僕もわからないのですが、間違いないのは、競走能力を高めるために故意に行つたことじゃないということです。

——でも、やはり馬の体調という意味では、やや風邪気味で今一つだったのでしょうか。

吉田 いま思えば、そうだったのかもしれません。それでも、相当に内容の濃いレースをしていたんですよ。タイムも速かったですし、そのときに二着だったプライドという馬は、次走のG1レースで楽勝しています。

——その後、帰国緒戦となったジャパンカップでは、ディーブインパクトも見事に雪辱しましたね。

ところで、ファンの人たちがいけばよくわからないのは、どうしてまだあんなに活躍しているのに、年内で引退してしまうのかということでしょう。

吉田 一般ファンの人たちには申しわけないんですが、ビジネス的にはある意味で自然の流れだと思えます。もしレースで脚でも折つたりしたらどうしますか。サラブレッドにとつて、骨折イコール死ですから取り返しがつかない。五〇億円と評価される馬にとつてはあまりにリスクが大きいわけです。それなら、馬のための安心も考えて、早く種牡馬(たねうま)にしてやろうとオーナーが決断するのは当然だと思ふのです。

もうクラシック三冠(皐月賞、日本ダービー、菊花賞)は全部とつているわけだし、天皇賞も宝塚記念もジャパンカップも勝つた。競走馬として目標のほとんどをクリアして、最後に残され

たテーマといえば、有馬記念くらいなものですよ。

——有馬記念はぜひ勝つてほしいですね。

吉田 そうですね、去年は二着でしたから、雪辱戦であるとともに競走馬としての集大成です。

### ▼種牡馬事業のシステム

——吉田さんには、この後、ディーブインパクトを社台グループの社台スタリオンステーションに迎え、種牡馬として成功させるといふ大きな仕事が残っているわけですね。

吉田 もちろんです。

——その種牡馬の事業を運営するシステムが、一般社会にはなかなか見られないものなので、読者にはよくわからないと思います。簡単に説明をお願いします。

吉田 シンジケートといって、種牡馬を一つの株式会社みたいなものと考えられるのです。一頭につき六〇株に分けるのが一般的で、「ディーブインパクト株式会社」の場合、一株八、五〇〇万

円、トータルで五一億円ということなんです。支払いは一、七〇〇万円の五年払い。

この価格のなかには、五年間の飼代、金利、保険料や宣伝費など、一切の管理費が含まれています。そして、一株につき一年一頭、種付けできる権利が得られるわけです。

——なるほど。それでディーブインパクトの種付け料はいくらぐらいの設定になるのでしょうか。

吉田 いちおう、一、二〇〇万円ぐらいですが、有馬記念も勝つと、一、五〇〇万円くらいになるはずですよ。

——種付け料が、意外と安いですね。僕は三、〇〇〇万円ぐらいかなと。

吉田 いやいや、産駒(その馬の子供)がすぐく走ると実証されていない馬がそこまで高くなることはありませんよ(笑)。ディーブのお父さんであるサンデーサイレンスさえ、最初はもつと安かった。それでも一、二〇〇万円というのはなかなかたいへんな金額なんです。

——それで、一株八、五〇〇万円を五年払いで買うでしょう。その株式会社、いわば投資家さんたちの採算はどんなものなんでしょうか。

**吉田** 一〇〇%儲かる、とまでは言いませんが、まず株を持っていて損はないと言われるように努力しています。というのは、六〇株で組んでいるけど、実際にはそれ以外に年間一五〇頭ぐらい種付けするんです。そして、そのうちの八割が受胎したとすれば一二〇頭。一二〇頭で種付け料が一、二〇〇万円とすると一四億四、〇〇〇万円じゃないですか。そうすると五年間やれば七〇億円にはなりますから、だいたいはカバーできるという計算になります。

——なんだか、おいしい話に思えてきた(笑)。

**吉田** もちろんラクではありません。いま言ったのは最低の見積もりで、もしディープリンパクトの子どもは走る、となったら本当に三、〇〇〇万円にもなります。でも一般的な話として

は、一年目の子供のデキがあまりよくないとか、走りそうもないとなったら、種付け料は一気に下がってしまします。

ですから、種付け料と種付け頭数をいかに維持するかということに神経を使う。そして、そのためには良い繁殖牝馬をいっばい集めて種牡馬の名を売る。名が売れた種牡馬だから、さらに質のいい繁殖牝馬が集まる……という循環をつくらなければなりません。

——なるほど、そういう作戦で吉田さんはこれまでも多くの種牡馬を成功させてきたんですね。だとすると、社台グループが募集する種牡馬の株なら、競馬関係者のみならず、みんなほしいということになりませんか。

**吉田** せっかく申し込んでもらったのに、心苦しくもお断りしなければならぬことが多いのはたしかです。でも、僕たちは株主さんを選ぶのも大事な仕事なんです。いかに良質の繁殖牝馬を持つている馬主さんや牧場に株主になつてもらおうかということが、種牡馬と

しての成否を握っているわけですから。

もちろん、自分の牧場にいる繁殖牝馬にも積極的に種付けして、自らもその種牡馬をサポートする。僕らのやることは、そういうマネジメントに徹することなんです。

——なるほど、そうするとドバイの王様がディープリンパクトの種を求めて、千歳空港まで繁殖牝馬を連れてくる可能性もあるんでしょうか。

**吉田** いやいや、凱旋門賞で負けましたので、いまのところはどうでしょう。飛行機代、維持費……リスクが大きすぎますから。

——ただ、結果が出て、子どもがすぐ走りそうだとしたら？

**吉田** 結果が出たら、来るでしょうね。サンデーサイレンスのときには来ましたがからね、やつぱり。僕らも繁殖牝馬を欧米に連れていくことはよくあります。こういう情報はあつという間に広がる、恐ろしいほどですよ、ほんとうに(笑)。

### ▼すべてを変えたサンデーサイレンス

——昔から北海道といえは、たしかに有力な馬の産地ではあったけど、世界全体から見るとそんな中心地ではなかった。それがわずか十数年ほどの間に、ドバイの王様が来るような世界の中心地の一つになりはじめています。もちろん吉田さんとそのご兄弟の活躍が大きかったからと結論づけるのは簡単なんです。

**吉田** うちの場合、ハード面から言うと、運動量を確保するために、なるべく広い土地を確保するようにしています。土壌も専門の学者にきてもらって改良しているから、本当に世界でいちばんいい状態に変わっている。馬の管理というソフト面においても、トップの人間を世界中から集めていますし、うちのスタッフもあらゆる国に派遣しています。

それらの人に勉強してもらい、自分たちも勉強して、それでノウハウを蓄積していますから。日本人というのは馬を扱っている人間のレベルが相当に

高い。血統面以外では、そういう蓄積が日本のレベルアップを語るうえで大きかったと思います。

——それでは、馬の血統面においては、いつ頃が世界のトップレベルに肩を並べするための転換期だったとお感じですか。

**吉田** それは間違いなくサンデーサイレンスの登場によつてです。この種牡馬一頭のおかげですべてが変わっている。

そういう素晴らしい種牡馬というのは、影響力がものすごくあるわけです。アメリカでもミスタープロスペクターとかノーザンダンサーという種牡馬がいて、それが一時代を築いて、その子孫たちが大繁栄したわけだけど、サンデーサイレンスがたまたま日本にきて、それと同じような存在になつてくれたわけです。

——たまたまと言っても、すごく苦勞したわけですよ。

**吉田** もちろん、たいへんな苦勞です。——でも、はじめのうちはサンデーサイレンスが手に入るとは、吉田さんご自身

も思つてなかったでしょう。

**吉田** もちろんです。あれは十五年ぐらい前だったかな。

——勝己さんのお父さんの吉田善哉さん、僕は天才だったと思うけど、「アメリカからすごい馬がくる、ほんとうにすごい馬がくるんだ」と言っていた。

**吉田** でも、サンデーサイレンスは、こと血統に限つていえばそんなにすごい馬ではないですよ。そうでなければ、日本に買えなかった。一、一〇〇万ドルですか、あのとき一ドルが一五〇円くらいで一六億五〇〇万円でした。

そのとき、サンデーサイレンスのライバルにイージーゴアアというものすごい血統の良い馬がいたんです。アメリカの人たちはもうイージーゴアア、イージーゴアアといつて三、〇〇〇万ドルぐらいのシンジケートが組まれました。競走成績はサンデーサイレンスのほうが上だったんですけど、種牡馬としての人気はすっかりイージーゴアアの陰に隠れてしまつていたので、売つてくれたんです。

——そのへんの運の強さもそうですし、やはり一種の突然変異というか、通常の常識では考えにくい野生の血みたくないものが、馬にも吉田善哉さんにも共通していたんでしょね。

**吉田** ええ。でも、その頃はそんなケンタッキーダービーで勝った馬が現役でなんか、日本に絶対入ってこない時代でしたから。一六億円なんてその頃は手も足も出ない金額で、それは相当無理したんです。

——やはり勝負をしたということですね。

**吉田** その頃は種牡馬で買ってくるのは、一〇〇万ドルとか二〇〇万ドルくらいが普通でした。だって種付け料は一〇〇万円ぐらいいなものでしたからね。

### ▼世界一を目指す戦い

——この間、安西塾長が札幌の北海道連合三田会のとときに、「世界に目を向けた大学経営というものに、ノーザンファームぐらいい参考になるところはない」と、

おっしゃった。

**吉田** まさかあり得ないですよ(笑)。ほんとうに光栄なことですが。

——いや、人を育てるのも馬を育てるのも同じと考えれば、牧草とか、従業員も、世界一のところで勝負しているわけですよ。だからかなり熱心に見ていらっしやいましたよね。

**吉田** でも馬の世界と言ったらまたすごいですよ。それこそドバイの王様だとか、とんでもない資産家がやっているから、すごい高いレベルの戦いになつてしまふ。

——実際、そういう人たち相手に勝負をしているわけですよ。

**吉田** 結果的にそういう状況になっているんです(笑)。そしてきりがない、だから終りが無い。どうして勝負しているかというところ、結局そうしないとあつという間に置いていかれてしまふからです。

——日本ではいまだって日本一なんてけど、それにとどまっていることは不可能なんですよ。

**吉田** やり出したら途中でやめられないですよ(笑)。うちの社台グループのなかでも競争は激しいですから。

### ▼馬術に明け暮れた塾生時代

——ではそういう世界レベルの牧場の経営者である吉田さんに、少し大学時代のことをお聞きしましょう。授業にはマメに出席されていたのですか(笑)。

**吉田** いいえ(笑)。  
——でも学校の近くまでは行っていたんですよ。

**吉田** 私は馬術部に行ってみましたから(笑)。馬術部では成績良かったですよ、四年のときは関東ではチャンピオンで、全日本では二位だった。障害と馬場馬術と両方です。

——加藤寛先生にはすごくお世話になったそうですね。

**吉田** 馬術部の部長を務められており、僕の仲人をお願いしたんですよ。

——落第しそうなときに、いつも救済措置を取ってくれたという(笑)。もう時効でしょう。

**吉田** いえいえ、いくらなんでもそこまでは……。ものすごいいい先生で、優しい先生です。ゼミなんか存在があることさえ知らない。卒業式のとときにこれが有名な図書館かと、写真を撮ったぐらいですから(笑)。

——その頃の馬術部といえは、ものすごく強い時代でしたね。

**吉田** そう、僕の一つ上が竹田恆和さんで、全日本に優勝して、もちろんオリンピックピックにも出ていますし、とにかく竹田さんの代がいちばん強かった。

——でも、体育会の生活といったら、それは厳しかったでしょう。

**吉田** 朝四時頃から起きて、馬の世話をするでしょう。馬に乗るのは五時頃からです。それで一年生の頃は鎧なしで乗る「鎧あげ」というのがあるんです。ガンガン振動がして、すごく痛いです。そういうことやつて、とにかく根性を鍛える。飛び乗り一〇〇回とかやらされたり、いちばん遅れたら、長靴履いたまま一、二〇〇メートル走りされる。そのせいかどうか、もともと痩せてい

るのに、もう二週間ぐらいいで一〇キロぐらいい痩せてしまったこともありましたよ。僕は慶應高校で一年から馬術部でしたが、高校も厳しかったですけどね。

馬のほうはずがにいまは乗ってないですけど、五年ほど前まではずつと毎日のように乗っていましたよ。

——慶應は全体に良い学校であるけれども、こうやってちゃんと世界に通用するような人材が出るんですから、授業だけがすべてということはないんじゃないですかね。(笑)。

**吉田** いえ、僕の口からは何とも言えませんよ(笑)。

——吉田さんのところは、いま若い人もたくさん抱えておられますが、「これをどうやれ」とか何とか説教するわけでもないでしょう。やっぱり吉田さんのうしろ姿を見て、ついてくるわけでしょうね。

**吉田** あんまり説教とかはないですよ、僕は、結論から先に入るから(笑)。牧場にはパートさんを入れると四〇〇人ぐらいいの人がいます。

また、苫小牧市にノーザンホースパークという馬のテーマパークがあり、レストランが四軒あつて、公園もあり、乗馬ができたりします。慶應高校と志木高校が修学旅行に来てくれてます。

——それはいいですね。

**吉田** みんながやつてくれるから、僕はある程度仕事していい。そういうスタイルです(笑)。

親父は慶應ではないんですが、兄貴と僕が慶應で、息子もそうなんです。いま息子はうちの牧場を手伝っていますけど。

——時代も変わったのでしょけれど、息子さんは当時の吉田さんより勉強して、普通の社会人に近いね(笑)。

**吉田** いやいや、いまの時代、いろいろなことを勉強しておいたほうがいいのはたしかですからね。なにしろ、この仕事は、これが正解というものがなから、柔軟性が必要なんですよ(笑)。  
——そうですね。今日はどうもありがとうございました。